



柿小だより

令和5年1月 柿崎小学校発行

「大丈夫？」について

校長 近藤 隆司

痛そうにしている相手や、困っている様子の人を気遣うときに、「大丈夫？」と声をかけることが多いです。自分の目の前で肉体的に痛い思いをした人に、自分の目の前でショッキングな内容を見たり聞いたりして呆然としている人に、明らかにいつもと違う様態で元気のない人に、「大丈夫？」と声をかけるのは、あたりまえに感じています。そして、だいたい声を掛けられた相手は「大丈夫(です)」と応えることが多いです。

先日職員室で、「困ったなー」「どうしようかなー」と言っている職員に、「大丈夫？」と声をかけたら、「大丈夫じゃないです！」と正面から応えられました。私はドキッとしました。相手を心配して声をかけているのに、「大丈夫じゃない」と応えられてドキとした私は、何を心配していたのでしょうか。相手が「大丈夫」と応えることを想定して、声をかけていたのでしょうか。その後私は、「どうしたの？」と問うたのですが、その職員は、「いや、いいです」と言って、また一人で考えはじめました。私は何の力にも、助けにもなりません。当然その職員は、その後自分の課題解決に向けて、あれこれと思考を巡らし、実践し解決したものと確信しています。

私は職員に、「子ども(大人)の『大丈夫』という応えは、大丈夫じゃないから、しっかりと聞き取りをしたり、見守ったりする必要がある」と常日頃から指導しています。「大丈夫じゃない(と感じられる)相手の力になりたい」「大丈夫じゃない(と思われる)要因を一緒に取り除いていきたい」という気持ちがあるからこそ、声を掛けるのです。特に子どもは、大人からの「大丈夫？」という問いかけに対して、自分の(心の)痛みや困惑さを言葉で表現することが上手くできないので、とりあえず「大丈夫です」と応えるのだと思っています

では、「大丈夫？」と声を掛けられた人は、どうなのでしょう。「うるさいな」「放っておいて欲しい」「私に構わないで」と感じる人は少ないのではないのでしょうか。相手に「大丈夫？」と声を掛けられるような様子や態度を示しているということは、無意識に「私を見て!」「助けて!」という「聞こえない声」を発しているのかもしれませんが、気丈に振る舞っていても、それが無理をしていたり、不自然だったりすれば、近しい人は「おかしい」「何かあるな」と気付きます。そこで「大丈夫？」と声を掛けるのです。

「大丈夫？」という声かけが「空振り」に終わってもかまいません。「声を掛けよう」「声を掛ける必要がある」と感じて、実践した自分の「感性」や「感覚」や「実行力」をこれからも大切に、またそれらが一層敏感になるよう「おせっかい」を続けていこうと思っています。令和5年は、周りの人に「大丈夫？」と声を掛ける、小さな「おせっかい」を広めていきませんか。

「自分も相手も大切にしよう」

11月の人権強調月間に柿崎小学校では、次のような取組を行いました。

1 生活朝会で「人権」について考えました（11月2日）

人権とは、「すべての人が生まれながらにもっている幸せに生きる権利」のことです。自分も周りの人も幸せに生きるためにはどうしたらよいか、全校の子どもたちと一緒に「学校の帰り道」という話をもとに考えました。1年生から6年生まで、各学年の子どもからの発言もあり、しっかりと考えている様子が伝わってきました。

<場面1のあらすじ>

支度や準備が遅れがちなゆうじさん。学校の帰り道にみゆきさんと話していると少し遅れてしまった。すると、たくまさんとかおりさんから、ゆうじさんだけがせめられた。

<子どもたちの発言>

- ・強く言い過ぎている。
- ・ゆうじさんにだけ言っているのは、おかしい。
- ・どうして、みゆきさんには言わないのだろう。

<場面2のあらすじ>

次の日、たくまさんとかおりさんは二人でおしゃべりをしていた。ゆうじさんは、みゆきさんとおしゃべりをしないで前を歩いていた。すると、たくまさんとかおりさんは、ゆうじさんだけをばかにした。

<子どもたちの発言>

- ・ゆうじさんは、「もう学校に来たくない」と思う。
- ・ゆうじさんは、「助けてほしい」と思っている。
- ・たくまさんとかおりさんは、昨日自分たちが言っていることと違うことを言っている。
- ・たくまさんとかおりさんは、自分たちが悪いことに気付いていない。
- ・みゆきさんは、どうして助けないのか。助けないみゆきさんも悪い。

<子どもたちに分かってほしかったこと>

いじめや差別が起きる時は、子どもたちの中で、優劣や上下関係といったクラスの中にある構造的な問題があります。

今回、子どもたちと一緒に考え、分かってほしかったことは、いじめられた人は、「やめて」と言う権利、助けを求める権利、そして、楽しく過ごす権利があるということです。

でも、声を挙げることができない人もいます。だからこそ、いじめや差別に気付いた周りの子がいじめや差別を止めたり、「大丈夫」と言ったりできるような指導や支援を継続していきます。

朝会では、子どもたちがいじめや差別をしない自分になれるように、次のことを心に留めておいてほしいと伝えました。

- 自分の失敗を忘れない。(自分のことを正直に話す)
- 気付けば、変わることができる。
- 一緒に考えてくれる人を大切にする。

話に出てくるたくまさんやかおりさんも、はじめは注意だったのかもしれませんが、でも、人権が侵されるときは、必ずと言ってよいほど、他者への理解が不足しています。実際の生活の中では、お話のようにならない時もありますが、「他者の痛みに気付いたり、相手を大切にしたりする人権感覚」が身に付くような学習や体験活動を今後も積み重ねていきます。

じぶん あいて
自分も相手も

おたがいを大切にしよう





2 11月・12月の生活目標「自分も相手も大切にしよう」

生活朝会の後、各クラスで生活目標を実現させるための学級のめあてを話し合いました。「みんなの気持ちを考える」「困っている人がいたら、助けたり励ましたりする」「仲間外しはしない」「見て見ぬふりをしない」「言葉や行動に気を付ける」など、各クラスで子どもたちが考えを出し合い、めあてを決めました。学級のめあてを、全クラス分掲示することで、全校で取り組もうという意識が高まりました。

11月・12月が終わればそれで終わりではなく、子どもや私たち教職員自身の中に潜んでいる「優劣」や「できる、できない」といった意識で判断している差別意識がないか、常に振り返り、考えていく必要があります。「**自分の差別意識に気付くことで、変わることができる**」、このことを繰り返し話し合っていきます。

3 授業実践

同和問題に関連する学習(部落問題学習)や人権学習

各学年で、同和教育副読本『生きる』などの資料を活用し、いじめや仲間はずし、身の回りの人権問題、同和問題などについて授業を行いました。今回は、6年生、4年生、2年生での学習の様子を紹介します。

6年生では、例年、部落問題学習を行っています。差別を受けていた人(銀閣の庭園を造った又四郎)や差別をすることが当たり前の時代に、「又四郎こそ、人なり」と言ったお坊さん(周麟)と又四郎の生き方から学びました。子どもたちは、「**自分もその時代に生まれていたら差別する側になっていたかもしれない**」、「**又四郎のような人の心、広い心をもっている人間になりたい**」、「**周麟のような差別をしない人になりたい**」と感想に書きました。

また、6年生は柿崎中学校で行われたハッピー仲間集会で、中学生と中学校区の6年生と一緒にいじめについて考えました。



「差別を受けていた人々」が築いた庭や能楽は、現在、日本を代表する文化となっています。



4年生の人権学習では、「もやもや書き」の資料を用いて授業を行いました。登場人物のもやもやした気持ちから、決めつけや差別に対する憤りの気持ちを持ち、「ただ～しただけ」「みんなも言っている」「自分は悪くない。そっちが悪いんだ」という、差別を正当化しようとする人の不当性に気付きました。また、自分なら学級会でどのような発言をするかを考えることで、資料の内容を自分事としてとらえ、相手の立場に立った行動をしようとする気持ちをもつことができました。子どもたちは、「**どんな理由があっても差別は絶対にしてはいけない**」「**同じことが自分たちのクラスで起こったら、学級会を開いて解決することが大切だ**」との感想を書きました。

2年生の人権学習では、身の回りの生活体験で起こりうる鬼ごっこの場面で、仲間はずしにされた友達の気持ちを考えることを通し、目の前で起きていることを見て見ぬふりはせず、自ら行動することの大切さに気付く学習を行いました。子どもたちは、「**自分もしていた。見ているだけじゃなく、ゆうきを出してちゅういしたい**」「**仲間はずしはぜったいしない**」との感想を書きました。



子どもの人権感覚は、身近な大人によって磨かれます

家庭・学校・地域の大人たちが、様々な活動の中で他者(子ども、社会で生きる様々な人)の人権を尊重することで、子どもたちの人権感覚が育っていきます。

